
インフィニティー・コア

小倉慎平

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インフィニティー・コア

【Nコード】

N9812Q

【作者名】

小倉慎平

【あらすじ】

人体収集家望月ユウタの前に霧島という名の老人が現れる。自らを博士と呼ぶこの老人はインフィニティ・コアと呼ばれる紫色に光る球体を追って行く。不思議なことにユウタはこの怪しげな球体に心底惹かれていた。霧島博士が悪と永遠の象徴と呼ぶインフィニティー・コアとは一体何なのだろうか。

ドア越しに冷たい足音が響いた。コンクリートの階段を何者かがゆつくりと降りてくる。足跡が止まると、ドアが重たい音をならしながら開かれた。外からの微かな光が、男の足だけを照らし出した。部屋には窓一つなく、外からの光は完全に遮断されている。中は何かの研究室のように、わけのわからない機械でうめつくされていた。機械についた薄い水色の電灯が部屋全体を不気味に演出していた。

中に入ってきたのは白髪の老人で、縦長の顔に皺が刻まれている。厚い眼鏡の奥で、鋭い目が暗い部屋を見渡した。

男がスイッチを押すとうっすらとした光が部屋の全体を照らしたが、まだこの部屋の不気味さをかき消すには足りなかった。

男はやけに老けてみえた。高い鼻が人間離れた印象を与えている。身長は183と高いが、着ている白衣がやけに大きく、引きずって歩いた。白衣の前をおおきく開け、中から茶色のズボンに濃い緑のスーツがのぞいている。

部屋の中央には大きめのラウンドテーブルが置いてあり、その上の天井から蜂の巣状の機械がぶらさがっていて、テーブルの上3センチメートルくらいの所で止まっている。その蜂の巣に小さな扉がついている。その扉の上には長方形の小さな電灯がプロセス完了を示す緑色に光っている。

男は蜂の巣の扉を開け、中からガラス瓶を取り出した。蓋は機械になっていて、その大きさは瓶に不釣り合いだった。そのふたの内側には二つの貝殻のようなものを先端につけた棒が向かい合って突き出ている。

その貝殻の間には小さな紫色の発光する球体がある。ガラス瓶の中は空になっていても関わらず、その球体は瓶の中心部分にあり、見えない何かで固定されているかのように、男が瓶を動かしてもち

やんと瓶の中心を保っている。

男はガラス瓶を頭上高く上げた。

「ついに完成したぞ」

投資家である望月ユウタは他に見る資産家のように腹を肥やしていた。縁の黒い眼鏡をかけ、額は薄らと滲み出た汗ででかてかとお光っていた。

一方の塩谷アキヒロはセールスマンらしくらず筋肉質だった。頭はきつちりと刈り上げられ、まるで鍛え上げられた戦士のようにぴんとした背筋をしていた。

ユウタは自分の書斎の椅子に座り、アキヒロはその向かいに座っていた。黒いアタツシユケースが、アキヒロが座る椅子の横に立っかけてある。

どちらも四十を超えているのだが、アキヒロは妙に若く見える。「失礼しました」家政婦のキョウコ・ベツケンバウアーがお辞儀をした。ドイツ人の父親を持つハーフのキョウコは奇麗な緑色の瞳をしていた。

キョウコが部屋を出て行くのを待つと、ユウタは机に身を乗り出した。

「今日は何を持って来てくれたのかね？」ユウタがそう言うと、アキヒロはアタツシユケースを机の上に置いた。暗証番号をあわせて、かちりとロックを外す。開けると中にはガラス瓶が入っていた。アキヒロはガラス瓶を取り出すと、ユウタの目の前に差し出した。

ユウタはそれをみるなり顔をしかめた。

ガラス瓶を医療用のもので、中には癌細胞でひどく破損した肝臓がホルマリン溶液に浸されていた。

「80パーセントが癌細胞に犯されています」

ユウタは顔をしかめたまま、瓶の中身を見つめた。彼は首を横に振った。

「ひどいな……全く美しくないじゃないか」

「これだけの物は手に入れるのが大変なんですよ」

「珍しいだけじゃ、だめだな。美しくなければ。それに私が今、一番欲しいのはクリスタルアイ症候群の目だ」

まったく、お前の言う美しさなど俺に分かるわけはないだろ。美しくなければだど？ 人体収集のどこが美しいのかと、目の前の男にそう質問を叩きつけてやりたかった。しかしそのみにくいものを懐の肥やしにしている自分が言うことではない。アキヒロには自分が腐りきっていることは分かっている。だが、目の前のこの男は自分は一番下の人間ではないように振る舞おうとしている。まるで自分が上流階級のたしなみをしていると言っているかのようだ。

「あの病気は三十年前、フィリピンの小さな集落で起こり、その後、病原菌は完全に消え去りました。おそらく、何らかの理由で死滅したのかと思われます。死体はほとんど焼き払われてしまい、闇市でも取引されているかどうかさえ分からないですよ」

ユウタはそんな事は関係ないと言うように言葉を返した。「他の人体収集家のやつと競ってるんだよ。恥はかきたくないのだ」彼は膝を机の上につき、身を乗り出している。

この男は恐らく地の底を這いずり回っている類いの人間なんだろう。そんな這いつくばった人間が、自分が這いつくばっている事にも気づきもしないで、どちらが上にいるのかを競おうとしている。

それに較べたら、自分は恐らくそういった奴らの上に立っているのだろう。少なくとも。奴らから金を巻き取っているのだから。同時に自分は地獄に落ちるのだろうということも知っている。

アキヒロは自分が険悪そうに顔をしかめているのに気づいた。それにユウタが気づいていないのを知って安心する。

「手に入り次第、真っ先にあなたにお届けしますよ」アキヒロは作り笑顔でいった。

「ああ。感謝するよ」ユウタはそう言って、背を椅子にもたれかけた。「他に何か持ってきたのか？」

「いえ、今日はこれだけです。それはお買い上げになりますか？」
「どれ」ユウタは瓶の中をのぞく。今回は瓶をまわしてゆっくりと見ると、苦いものを口に入れたかのように顔をしかめた。

「今日はやめておくよ。好きじゃないんだ。こういう気持ちの悪いやつは」

どれも同じだろ。人の体の一部なんて、どれも気持ちの悪いものじゃないか。そう思ったが口にはしなかった。

ユウタは瓶を机に置くと、前に少し押しやった。アキヒロはそれをアタツシユケースに入れて、ロックをすると立ち上がり、ユウタに手を差し出した。

「今日はどうも」そう言って、ユウタは彼と握手をかわした。

「次回はお気に召すようなものをお持ちしますよ」そう言って、アキヒロは立ち去った。

「つまり次はクリスタルアイを持つてくるということだな」

「努力はしますよ」

アキヒロ愛想の良い笑顔を浮かべると、そそくさとこの広い部屋を出た。

部屋の外でキョウコが立っていた。アキヒロはキョウコと挨拶を交わすと、いつもと同じ様に胸くその悪い気分で屋敷を後にした。

いつもと違うのは金が手に入らなかったことだ。まあ、いいさ。次は必ず。

「で、今日は何を買ったんですか？」書斎に入るなりキョウコがたずねた。

「何も」そう言って、ユウタは机の前まで移動した。「今回は気持ちの悪いぐちゃぐちゃになった肝臓だけだね」

彼は机の上に座った。キョウコの目をみつめる。その目は鮮やかなまめとはいかないが、緑がかっていて、ビー玉のように美しかった。

「あなたのコレクションは、私にはどれも気持ちが悪いわ」

彼はわざとらしく微笑んで言った。「僕はね。目が一番好きなんだ。君の瞳は特に、ね。コレクションにしたいくらいだ」

「私が寝ている間に忍び込んで、取り出す気がじゃないでしょうね？」

キョウコは困った子だと言わんばかりに、わざとあきれた様子を見せた。キョウコは28とユウタより随分と若かったが、こういう仕事をするとまるで母親のように見えた。だが肌は若々しく、その首筋は吸血鬼が喜びそうなほどだ。ユウタはいつか彼女を抱いてやろうと思った。

「まさか。そんなひどい事はしないよ。でも、たぶん君が死んだらそうするかな」

「あら。じゃあ、遺書に私の目をあなたに相続するように書かなくちゃね」まるで歌う様な流れる声でキョウコは言った。

「あ、いけない。そういえば、あなたに会いたって人がいるけど、キョウコは思い出して言った。

「誰だい？」ユウタは立ち上がり、キョウコに歩み寄った。身長の低い彼女は巨漢の主人を見上げなければならなかった。

「霧島博士って言う人です」

ユウタは首をかしげた。頭をフル稼働させても、そんな人物に覚えはない。そもそも博士に知り合いもないし、今時自分をそんな風に呼ぶ人間かいたものかと彼は考えた。

「知らないなあ」やる気のない声でユウタは答えた。

「追いますか？」

「ああ、そうしてくれ」そう言ってユウタは片手で指示をした。

キョウコが戻ろうとすると、大きな白衣を引きずりながら、長身の男が部屋に入って来た。左手にアタッシュケースにぎり、右手で杖をつきながら歩いてくる。その姿は遺伝子操作を使って悪の限りを尽くしたドクターモローを思い起こさせた。

「この家の者は人を待たせるのが趣味なのかね？」その話し振り

はまるで自分が全ての人間の上に立っているとでも思っているかのようにだった。

「すみません。アポイントメントがなければ、お会いできないことになっているんです」ドクター霧島はユウタに一瞥をくれると、首をかしげてキョウウコをみた。

「おかしいな。私が見たい男は目の前にいるんだが。アポイントメントがなくても、会えたじゃないか」

霧島博士は杖をつきながらキョウウコの横を通りこした。

「今はお話できないんです」こんどはユウタが男を制止する番。

「なぜだね？ 忙しいのかな？」霧島は少し皮肉まじりともとれるように言った。

「いえ、ただ、あなたのことは知りませんし。今日は夜も遅い」

この男はよくもこうずかずかと他人の領域に足を踏み入れてくる。ユウタは苛立った。

「何？ 知らないやつとは話せないのか？ 私は霧島ヒロト。科学者だ」

霧島はアタツシケースを机の上に置いた。

「座ってもいいかな？」返答も待たずに霧島は椅子に座った。

ユウタはキョウウコに目で合図すると、彼女はうなずき、部屋をあとにした。ユウタも自分の椅子に座る。

「10分だけですよ。本来はこんなことしないんです」本当は一分一秒とこんな男と話たくはなかった。だが、それが態度に出てはいけない。おそらくこの男はそこについて、また皮肉の一つでも言うのだろう。だが、ユウタはそんな皮肉につき合うつもりはないし、これ以上イライラしたくはなかった。

「ああ、十分だよ」そういうと、霧島はアタツシケースのロックを外した。

「奇妙なものを集める趣味があるそうですね」

ユウタは一瞬、凍った。なぜ、見ず知らずの老人が、自分の趣味を知っているのだろう。それも誰にも知られてはいけない、秘密の

趣味を。

「どうして……それを？」なるべく平然を装いながら雄太はいった。「いや、そんなことはどうでもいいんだ。私はビジネスでここに来ているものでね」霧島はアタッシュケースを開ける。

「人体ではないんだが……」

霧島博士はガラス瓶を取り出すと、ユウタに手渡した。中をみると、紫色に発光する球体が見えた。

「これは……？」それが何なのかさっぱり分からない。それにこのガラス瓶のふたはなんだ？ なんの機械だ？

「綺麗だろ？」

ユウタは球体をよく見つめた。それはまるで昔よくみた、手を触れると中に流れる電流が、手に吸い寄せられてくるあの球体に似ていた。

「綺麗かどうかはわかりませんが……」ユウタは慎重に言葉を選んだ。「何か自分に語りかけてくるような、そんな魅力がありますね」

霧島はにやりと笑った。

「それは君がその球体の持つ永遠の美しさに惹かれたからだよ。そして人が永遠に惹かれている理由は人生が非常に短くものであり、我々が限られた時間の中でしか生きられない存在だからだよ。永遠とは我々が到底手に入れることができないものだ」

一体この狂った博士は何を言い出すんだ？ この男の言っていることはどこか哲学めいているが、何の意味も持たないようにも感じる。

「そうは思わないですね。限られた時間の中だからこそ、人は満足できる。だから幸せになれるんじゃないですか」ユウタは反論した。自分も馬鹿げている。こんな議論のどこに意味があるというんだ？ 「だが、なぜ女は若さを保とうとする？ 化粧をし、アンタイエイジングを求める？ なぜ恋人たちは永遠の愛を誓う？」霧島は身の前に乗り出した。

「なぜなら、歳をとることを恐れるからだ。ある日突然、愛が目の前から消えてしまうのを恐れるからだ。それらは永遠でないことを象徴する」

「その点は賛成しますが」まあその通りだと思ったが、結局は彼にとつてどうでもいいことだった。

「永遠なんてものは存在しないんだ。特に我々には」霧島はガラス瓶を指差した。「だが、こいつにはある。こいつは永遠の美なのだ。だから君はこの球体に惹かれた。そして、その悪に。それこそが人々が成りたがっているものだ」

霧島はその球体を悪と呼んだ。悪？ どういう意味だ？

「悪？ それはどういうことですか？ なぜ、悪なんて言葉を口にしましたんです？」

ユウタは子供のように怯えていた。

「見るがいい。暗くて不吉な感じだ。この球体は悪のシンボルなんだよ」

ユウタにはこの霧島という男がますます狂人じみて見えたが、人が悪に惹かれているといったことが気になった。

「人が悪に成りたがっているといったんですか？」

ユウタはこれまでわざと敬語を使っていたが、自然にこの男に対して敬語になっていることに気がついた。何か惹かれるものが彼にはある。それが怪しければ怪しいほど、人間は惹かれてしまうものだ。

「その通りだよ。誰もが欲望の中に悪を持っている。理性もだがね。しかし、理性は欲望を抑制する。だが、本当は心の奥底では欲望を爆発させたいと思っているのだ」

「言いたい事は分かります。がまんすれば、いつもストレスはたまりますよ」

ユウタはすでにこの男に崇拜にも似た念をいだいていた。今まではこの男は信用できない男だったのに。

「そういうことだ。だが、なぜがまんする必要がある？ いい人を

演じたいのか？」

ユウタは笑った。「たぶん」と答えたが心の中ではその通りだと思っただ。

「とにかく私は永遠と悪を作った。私はこれを、インフィニティ・コアと呼んでいるがね」

「インフィニティ・コア」知らないうちにユウタは繰り返していた。「これをお前にやる」

「僕に？ なぜですか？」何故かは疑問に思ったが、正直どうでもよかった。つまるところ彼はインフィニティ・コアを欲していたのだ。「なぜって、君がそれを持つに相応しい人間だからだよ。人体収集家なんて、心の闇の象徴じゃないか」

「心の闇……人体を収集することは、まあ、暗いことだとは思いますが」ユウタは言葉を探していたが、霧島はそれを遮った。

「君のしている事が暗いとは言わんよ。君の集めているものが闇なんだ。君は死を集めているんだよ」

「死を集める……その表現、気に入りました」彼は実際に気に入っていた。

ユウタはインフィニティ・コアをみつめている。霧島は彼のようすを目にして、にやりと笑みを浮かべた。

「どうやら、気に入ってくれたみたいだね」

「分かりません。ただの球体ですし」本当はそれがただの球体ではない事はわかっていた。それは彼の頭に語りかけてくる。誘惑している。まるで目の前の女を抱きたいと願うように、ユウタはインフィニティ・コアを欲していた。

「ただの球体ではない。人がもつ黒い要素と人が何に魅了されるか教えただろうか？」霧島はユウタを後押しした。その必要のない事はわかっていたが。彼の計画が実行されるまで、後一歩だ。偉大なる計画まで、あとわずかなのだ。

ユウタはガラス瓶を机の上に置いた。

「こいつは置いて行く。いらぬのなら、捨ててくれてもかまわん」

霧島博士は空のアタッシューケースを閉じ、ロックをかけた。

「いえ、捨てませんよ」彼は慌てて言い返した。

霧島が微笑む。「すばらしい」彼は立ち上がり、引き返しはじめた。

「ありがとうございます」ユウタは霧島の背中にいった。霧島はにやりと笑い、部屋を出て行った。

ユウタはインフィニティ・コアを再び見つめた。

ああ、なんて美しい玉なんだ。

大きな計画を成功させる為にはたくさんの人を使う必要がある。

そしてその為に人を騙すことは必然的である。たくさんの人材、膨大な資料と調査、そしてそれらを動かす行動力とカリスマ。動かすものが大きければ、大きいほど、それらは大きく必要となってくる。社長ならば会社を、大統領なら国を。大きなものを動かすには、それ相応の力が必要なのだ。

だが、彼の場合は違う。彼が世界を、人類全体を動かすには一人の男、たった一人の男を騙すだけで十分だった。

人の感情というものはこの世でもっともエラーの多いプログラムだ。そのプログラムからエラーを引き起こさせるには、一人の人間に対する少しの調査と、あのインフィニティ・コアがあれば十分なのだ。

今、霧島はすばらしい気分で望月ユウタの屋敷から外へ出た。そして、長い庭を通り抜けて敷地の外に出ると、白衣のポケットから黒い箱状の機械を取り出した。その箱にはアンテナとスイッチがついている。霧島は喜びにうちふるえながら、スイッチを押した。

彼は笑いをこらえようとしたが、あまりの滑稽さに笑わずにはいられなかった。始めのうちは声を押し殺して、肩で笑っていた。ついにこらえきれなくなり、声をだして笑った。

霧島のたからかな笑い声は夜の中でこだまし、そして終焉の中へ

と消えていった。

雄太はカウチに座り、片手でガラス瓶をかかげてインフィニティ・コアを見上げるようにして見つめていた。蛍光灯の光をあててインフィニティ・コアをのぞくと、まるで祝福を受けたかのように天国へのぼっていく心地がした。

彼は指先で愛おしそうにインフィニティ・コアにそってガラス瓶をなぞった。

「美しい」

ビープ音がガラス瓶の蓋から聞こえた。蓋のついていた緑色の光が赤色に変わった。貝殻状の金属の間で安定していたインフィニティ・コアがふわふわと浮いている。

コアが動き出した気がした。実際、それはガラス瓶をすり抜けて、ユウタの額の高さまで浮上した。

ふわふわとユウタの額に近づくと、球体は無数の触手をのばし、それを彼の額に触れた。ユウタは頭の中を何かが這いずりまわるような、何かに頭の中を探られるような気味の悪い感覚を味わった。

動けなかった。まるで五感と脳の支配を奪われたようだ。様々な感情が彼の頭の中を駆けめぐった。怒り、悲しみ、喜び、快感。それらがめまぐるしく彼の脳を刺激していく。

インフィニティ・コアがユウタの額から、頭の中に侵入した。その時、彼は真の悪をその身に感じた。それは誰もが想像しえぬものだった。彼はおののき、涙を流した。もし人間に悪の心があるとすれば、それは真の悪の原液を水で何万倍にも薄めたものに違くない。

彼は、その薄まった悪の溶液に原液が流れ込んでくるのを感じた。悪の溶液の濃度はその量とともにどんどん増していき、やがて溢れ出した。

ユウタは目の前が暗くなっていくのを感じた。体に力が入らなく

なり、倒れた。

だが、そのめまいも一瞬で、すぐに気分もよくなり、体に力も入るようになった。

彼はすがすがしい気分で立ち上がった。まるで生まれ変わった気分だ。不安も迷いもない。なんでもできそうな気がする。そう、欲しいものは全て手に入れることができるんだから。

彼は解放されたのだ。

夜も10時をまわった。今日の一通りの仕事を終え、チエツクも済んだ。どうも気がかりなのはあの霧島という男の事だ。男が屋敷をでてから、30分。ユウタがいつも客を招き入れる書斎から出てくる様子はない。

初めて霧島を見たとき、キョウコは一種の不安を覚えた。この男の体からは毒がにじみ出ている。そして、その体に触れたが最後、その人は毒に体を蝕まれて滅びる。そんな恐怖にも似た不安を彼女は感じたのだ。

キョウコが書斎に戻ると、ユウタはそこにいた。彼は机の後ろで立ったままどこかを見つめている。いつもの彼とどこか違うことを彼女は感じとっていた。

「一体、何だったんですか？」キョウコがきいた。

「何も。お仕事の話だよ」「彼の言うお仕事というのは、もちろん彼のコレクションについてのことだ。

ユウタはゆっくりとキョウコに近づいてきた。

「大丈夫ですか？ おつかれのようですよ」

キョウコはユウタに思い切り殴られた。彼女はよろめき、体制を直そうとしたが、そのまま後ろに倒れてしまった。

キョウコはユウタを見上げた。つーっと鼻血が流れ出る。ユウタはキョウコを見下ろして笑っていた。

「一体、どうし」

ユウタはキヨウコの胸元をつかむと彼女を立ち上がらせた。そしてさつきよりも強い力で彼女の顔を殴りつけた。

彼女は部屋の真ん中に置かれているガラス製のテーブルに倒れ込んだ。

キヨウコは逃げようとしたが、またユウタにつかまれてしまった。恐怖にキヨウコは叫んだ。ユウタは彼女を投げ飛ばして、カウチに押し倒した。

ユウタはキヨウコの上に馬乗りになった。彼は悪魔のようになたにた笑いをキヨウコに向けて言った。

「お前のその綺麗な緑色の目が、本当に本当に欲しいんだよ。その美しい目玉が」

キヨウコはユウタの手が彼女の顔面に迫ってくるのを見た。そして彼女から光が奪われた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9812q/>

インフィニティー・コア

2011年2月17日12時25分発行